

## 佐藤尚中と大学東校

小川 鼎三

尚中は文政十年四月八日（一八二七）下総小見川で藩医山口甫僊の次男として生れた。今考えるとシーボルトが日本に数年間（一八二四―二九）滞在して大活躍をしていた時に生れ、シーボルトの娘、楠本イネが長崎で生れたのも文政十年であり、後にイネは産科医として明治の宮中に仕えていたので侍医の尚中と相識る機会があったかもしれない。

尚中は順天堂初代の佐藤泰然のもとで学び稀代の秀才であり、大変な勉強家であったので泰然の養子となりその後継者となつて佐倉の順天堂の名を広く天下にとどろかせたのであります。明治維新の戦となつて有力な譜代大名堀田氏の立場は難しくなり、当時佐藤舜海と称した尚中は佐倉藩の重臣であり、会津側と薩摩側の両方から頼まれて大いに困つた。

尚中も官軍の催促で止むなく途中まででかけたようだが、途中で佐倉に戻り、養子の佐藤進と高弟の倉次元意とが白河へゆき菊の紋章のついた奥羽追討陸軍病院旗をかかげて官軍のため尽力したが、結局会津が陥落し、進は明治元年の末に佐倉に戻り、間もなくドイツ留学を決して、翌二年二月に横浜に行き、六月二十一日アメリカの船でサンフランシスコに向い、パナマ、ニューヨークを経てドイツに着いた。ほぼ同時の明治二年の八月に新政府から尚中に上京せよとの命令がきた。その文面は「佐倉藩佐藤舜海、右今般召ニ相成候処、不快ニ付当分御猶予願出候得共、於開拓御用有之ニ付不快中ニ候共、押而出府候様更ニ御沙汰ニ相成度候事 八月」とある。この文章を見ると、その前に上京命令が尚中にきたが、彼

は病気を理由に断わった。おそらく病気は事実である（肺結核か）。病気でも出てこいという致命で、開拓に御用があると  
いうのは北海道行きを暗示するようである。それに尚中は当時ストロマイエル外科書の翻訳に全力を尽していたのであ  
る。その訳書『外科医法外編』巻一より巻三、巻七より巻九まで尚中の自筆原稿と思われるものが今も順天堂大学に残っ  
ている。外編巻七の終りに「己巳（明治二年）十月廿九日夜業を遂ぐ」とあり、巻八の初めに同じ日の「十月廿九日夜起」、  
その終りが十一月六日、巻九の初めは同じ「己巳十一月六日記」、その終りに「己巳十一月八日夜業を遂ぐ」とある。即ち  
尚中は新政府に呼ばれて東京に出るに際して、それまでの仕事をまとめようと夜を日に継いで努力したのである。そして  
『外科医法外編』は巻一から巻六までが明治五年英蘭堂から出版された。

そのころ明治の初め日本の医学制度は著しい変化をしていた。

明治と改元して九月に下谷和泉橋通の津藩邸即ち藤堂屋敷が「大病院」となり、医学所がその付属となったが、翌二年  
二月に医学学校兼病院と改称された。二年六月に明治政府は昌平坂学問所（今の湯島聖堂とその附近）を大学校と称し、旧開  
成所（一ツ橋）を開成学校と呼び、医学学校兼病院と共に大学校の付属としたのである。そして同年十二月十七日に右の三  
校をそれぞれ大学、大学南校、大学東校と改称した。その少し前の十二月五日、尚中（舜海）は大学大博士の辞令を受け  
ている。当時の博士は学位でなく、大中少の三段階をもつ官職名であり、大博士は大学の教官として最高の地位である。

明治二年の初めに医学取調御用掛となった佐賀藩の相良知安と福井藩の岩佐純は共に佐倉の順天堂で尚中に学んだ者で  
ある。明治三年五月には相良知安らの建議により大学東校を上野寛永寺の焼けあとに新設が一応きまったが、同年七月オ  
ランダ人の医学教師ボードインがその地を視て将来この地は公園とすべきことを主張し、本郷の加賀屋敷跡がその替え地  
となった。尚中は三年閏十月より大典医を兼任した。明治四年五月九日、尚中は大学大丞兼大学大博士大典医となった。

またそのころ大学東校が建議して、典医と軍医を別系統とせず医政の一元化を図ったが、その主張は通らず、陸海軍医は  
それぞれ別派となる。明治四年七月十八日、大学が廃され文部省が新設された。大学東校は単に東校と改称され文部省の

所管となった。そのころ尚中の正しい読み方について南校より東校に問い合せがあり、東校は尚中に朱筆でタカナカと振り仮名をつけ回答した正式の書類が残っている。

明治四年八月下旬、ドイツ人の軍医ミュルレルとホフマンの二名が東京に着任して、東校の大改革を始めた。

明治五年一月に尚中は文部少博士、少典医となった。また博士という官職名は明治五年九月に廃止され、明治二十年に学位として復活する。また明治五年一月二十八日付で東校から文部省宛に病院改称伺という書類が提出され、これは承認された。病院では病人を治すという意味がないから、今後は医院と称したいと尚中が主張したのである。この主張は通ったので、第二次大戦後まで多くの大学病院は大学付属医院と称した。順天堂は尚中の遺訓を守り、今でも医院を正式の名称にしている。戦後の厚生省の規則では、病床数が二〇以上のものは病院と呼ぶとあるので、私どもは法的には「順天堂医院」と称する病院の中にある。

明治五年十月発行の「新聞雑誌」という雑誌の第六二号に「変則生徒教授廃止について文部少博士佐藤尚中の建言書」が載っている。ドイツ人教師の言うごとく永い年月をかけて高級な医者を作るのも大切だが、今の日本は良い実地医者が足りなくて困っている。日本語をもって教えて比較的短い年月で優秀な医者をつくるのが大切だと主張した。政府はこの建言を入れてミュルレルとホフマンの契約期限が切れると、すぐに両人がまだ日本にいるときに、通学生、後に別課生とよばれる洋方医の速成を、日本人教師により行なうことになった。この別課卒業生が、明治、大正の医学界に大きい役目を演じたことは周知であろう。

明治五年八月三日に文部省は学区制を設けて、東校は第一大学区医学校となった。このころ尚中は、医学校の職務を全く辞した。更に明治七年五月七日に学制改革があり、第一大学区医学校は東京医学校と改称された。尚中の退職については、宮中で玉体拝診のときの医者の歩き方などについて、改善を申し入れて容れられなかったこともよく挙げられている。

尚中は明治八年、湯島に順天堂医院を創立し、その直後大病をし、熱海にたびたび保養のためかけたが、下谷の根岸に別荘を求めて、そこから湯島の順天堂に、三と八の日は休み、他の日は人力車で通勤した。そのころ尚中は、ニーマイエル Felix von Niemeyer の内科書を翻訳していた。

この内科書翻訳は『済衆録』という題名で出版された。巻一から巻六までと巻八、巻十、巻十二、巻十四までの十冊が、いま順天堂に残っている。その十四冊まで英蘭堂で出版されたことはたしかである。巻十四の奥附に明治十四年三月十七日版權免許とあり、十五年十月の出版は没後に出たものである。

尚中自筆の済衆録の巻三、四、五（以上呼吸器）、巻十、十一、十二（以上消化器）の原稿六冊がいまも本学に残っている。

明治三年正月に横浜に住む養父佐藤泰然が心境を在ベルリンの佐藤進とサンフランシスコの佐藤百太郎に書き送った手紙の内容の一部を紹介する。まず、進への文の一部に「舜海（尚中のこと）も度々之召に付不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>止事<sub>ニ</sub>出府に相成候、乍<sub>レ</sub>去日本にては第一之医に定り候と申者にて御手当月々三百兩余之被<sub>レ</sub>下候に付、日本に而ては大規模と申者にて難<sub>レ</sub>有事に御座候」とある。百太郎への手紙には「佐倉（尚中）に而も再三之召にて十二月出府いたし、大学大博士に被<sub>レ</sub>仰付一高現米三百四拾石（徳川様之千石計り）被<sub>レ</sub>下置候、難<sub>レ</sub>有事に御座候。何れ三、四年は不<sub>ニ</sub>相勤<sub>一</sub>候而は相成まじく候」とある。尚中が新政府の命令で東京にて日本第一の医者の席についた。いづれ三、四年は仕えなくてはならないだろうと將來までよく見透している。尚中と大学東校との関係は、養父の泰然がこの手紙で予言した如くになった。